

ちよんごころこころ

第一四一人を残す

「ぼんたか」のチラシに、お釈迦様との約束とあり、「*争いをしない *話し合いで解決する *差別をしない *殺さない、殺させない *盗まない *分け合えば余る *笑顔は世界のパスポート」と書いてありました。**信仰は祈り、拜み、崇拜することによって、共に合掌の姿になれ**、家族の平和、地域の平和、国の平和へと広がり、世界の平和へと繋がっていきます。それが仏教、私は、お釈迦様の教えであると思っています。

芥川龍之介と言えば「羅生門」・「鼻」・「河童」・「俊寛」が有名ですが、彼の功績は偉大で現在でも、芥川賞と言えば、直木賞と共に文学賞の最高峰に成っています。私でも知っている作家は、昭和十年に「普賢」で石川 淳氏・昭和二十四年に「盗牛」で井上 靖氏・昭和二十七年に「喪神」で五味康祐氏・「小倉日記」で松本清張氏・二十九年に「驟雨（にわかあめ）」で吉行淳之介氏・三十年に「白人」で遠藤周作氏・「太陽の季節」で石原慎太郎氏・三十三年に「飼育」で大江健三郎氏・三十五年「夜と霧の隅で」で北 杜夫氏・三十六年に「鯨神」で宇能鴻一郎氏・三十八年に「ジャーニー」で田辺聖子氏・最近では、私の世話に成った方の息子さんで平成十四年に「アサツテの人」で受賞された、諏訪哲史さん。私でも知っている方々です。その龍之介氏曰く、「人生は一箱のマッチに似ている。重大に扱うのはバカバカしい。重大に扱わなければ危険である。」と、彼は、才能あれども、若くして自死してしまいました。三浦朱門氏の奥様・曾野綾子女史は、生きるという言葉には、二つの意味があり「一つは生物として、病気もせず、死にもせず生きること。もう一つは、**自分の心が生きること**。肉体が生きていてかいがあ、と思うことです。そのどちらもなかったら、この世はすでに地獄でしょう」と。芥川龍之介氏には、生きて生きて、もっと活躍してほしかった、と思っています。

二月十一日に逝去されました、野村克也さんの語録が「中日新聞にのっていました。監督最後の言葉として「財を残すはⓉ、仕事を残すはⓊ、人を残すをⓇとする。野球界に人を残す事ができて少しは貢献できたかな」と申されました。私は流石であると感心しました。姿そのものによって感動を呼び覚まし、**敬愛と敬仰の念を起こさせる**。正に修行中の菩薩の姿でしょう。

輝く太陽の元に立てば、己の影が色濃く残ります。人生も斯くの如く表舞台で活躍しようとするれば**陰と陽のバランスを保たなくては長続きしません**。曇りがちの人生は、陽に進めるか、陰に落ちるか**の分岐点**です。雨に叩かれれば、這い上がるのにと**ても苦勞**します。人生は如何に人間として恥ずかしくない行動ができるか**にある**と思います。我々が心がけたいのは「**素直な人・控えめな人となり、威張らない人であり・温かい人に成ることです**」。怒れば般若の相となり、人は遠ざかり、難となって帰ってくるだけです。自分の益に成る物はありません。忿怒の形相をした仏像は我々が業（悪業）に狂えばろくなことにならないと見せしめているのです。**怒り狂う時、己の状態を鏡で見ると良い**。

棟方志功画伯の版画を見れば、「偉そうな格好をして、何様の積もりかい」と言っているように思えてなりません。事に遭遇した時、救いを佛に求める事があるでしょう。佛様は老若男女問わず、**貧富も問わず、地位のあるなしを問わず、全ての人々を平等に、救いの手を差し伸べて下さいます**。まず

第一に、佛力（神土系では念佛を指します。食睡病が起す煩惱を除く。諸人の厄難を救う）普照無際土消除三垢冥 広済衆厄難（に身を委ねてみることでです。「歓喜踊躍して善心生ず」、とあります。信仰心に目覚めずに、生きていく事ほど悲しいことはありません。

彼岸會は二十二日です

令和二年三月一日

善壽男善入院油掛地藏尊